

栽培漁業の種苗放流後における技術上の問題点 アワビを中心として*

小 竹 子之助

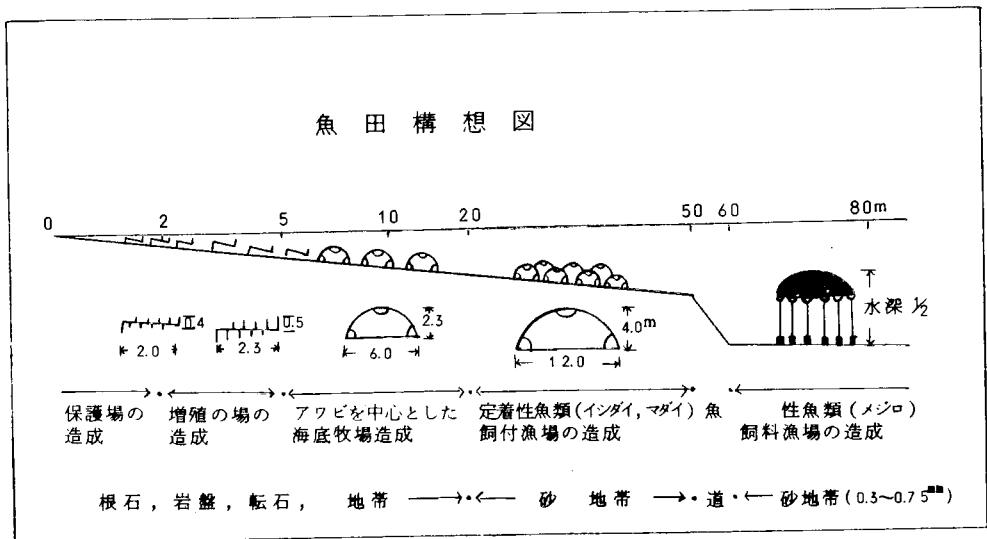
栽培漁業といわれている漁業の生産形態を、今後如何に展開するかという事を考え乍ら、現在、アワビを中心とした海底牧場造成応用試験研究を実施している。

アワビ漁場の実態を特徴的に類別すると、

- 稚貝の棲息には適するが、成貝の住み場が少ない。
- 成貝の棲息には適するが、稚貝の保護場が少ない。
- 稚貝・成貝の繁殖場はあるが、その規模が小さい。

この様な漁場に、それぞれ不足する条件を人工的に補充することが出来れば、アワビ類の生産は飛躍的に伸びるものとする。尚、海底牧場のねらいは、海底に人工の「住み場」と「藻場」を造成しようとするものであるが、さらに、これより沖合に魚類を対象とした魚礁を計画的に配置し、相互に有機的な関連をもたすことができれば、計画的生産がはかれる恒久的な漁場を造成することができよう。

次の図は、徳島県における魚田構想の一例を示したものである。



この構想をふまえて、昭和44年度は水深10m線のところに生産の場を、昭和45年度は3~5m線を中心に増殖の場を造成するための調査研究をすすめている。

※ 昭和45年9月4~5日 日本水産学会中国、四国支部大会シンポジウム講演要旨(課題;栽培漁業の種苗放流後における技術上の問題点, 於高松市)

そこで、実際に種苗をどのように放流するか、放流後どのような管理が必要か、また、どのような場の造成が必要か、生産に寄与するため再捕率を如何に高め得るかといった技術上の問題点について考えてみたい。

1. 種苗と放流

放流種苗の大きさは、殻長別にみた再捕率から殻長2 cm以上が望ましいが、減耗率の高い孵化後40日を経た殻長2～3 mm台の稚貝を有効に天然漁場へ放養することこそ今後の研究課題であろうと考える。

クロアワビは、殻長3 mm前後の大きさに成長したころ、粘液質の糸状の先端に、宙吊りとなり採苗期（透明塩ビ波板）から脱落してゆくさまを目撃したことがある。

放流時に、海底を濁らすと磯魚の食害を受けるので濁らせないように予め水槽に收容し、水槽のまま海底に沈め自然にはい出る方法をとっている。殻長2～3 mm台の稚貝を放流するにはビニール布で採苗し、そのまま放流する予定であるが、採苗の時点で黒色のビニール布と透明のビニール布の組み合わせによる初期餌料の確保と、更にビニール布から脱落する稚貝の保護場を造成することが必要であると考ええる。

2. 放流後の管理と増殖の場の造成

保護場は、水深1～2 m以浅に、増殖の場の造成は、3～5 m以浅のところを考えている。殻長5 cm以下の稚貝の生息場は、せいぜい水深3 m以浅であり、とくに干潮時の水深が1 m程度の浅いところがよいようである。保護場、ならびに増殖の場に沈設するブロックは、磯魚が内部に潜むことができないように工夫し角を多くした、N型ブロックの沈設を計画している。（図参照）

3. 生産の場の造成

直径6 m、高2.3 mの円形ドームを沈設し、ブロック面には餌料となる海藻類の移殖をおこなっている。（図参照）

このドームのねらいは、天然の魚場でみられるアワビの住み場よりも何倍か効率の高い、人工の住み場を造り出すことにある。漁民の手によって、充分管理しながら計画的に生産のはかれる、操業の場としたい。